

与謝野晶子訳

源氏物語 まぼろし巻



一冊堂青空文庫



源氏物語

まぼろし

紫式部

與謝野晶子訳

大空の日の光さへつくる世のやうやく

近きここちこそすれ

（晶子）

春の光を御覧になつても、六条院の暗いお気持ちが変わるものでもないのに、表へは新年の賀を申し入れる人たちが続いて参入

するのを院はお加減が悪いようにお見せになって、御簾みすの中にばかりおいでになった。兵部卿ひょうぶきやうの宮のおいでになった時にだけはお居間のほうでお会いになろうという気持ちにおなりになって、ま  
ず歌をお取り次がせになった。

わが宿は花もてはやす人もなし何にか春の訪たづねきつらん

宮は涙ぐんでおしまいになって、

香をとめて来つるかひなくおほかたの花の便たよりと言ひやなす

## べき

と返しを申された。紅梅の木の下を通って対のほうへ歩いておいでになる宮の、御風采ふうさいのなつかしいのを御覧になっても、今ではこの人以外に紅梅の美と並べてよい人も存在しなくなったのであると院は思いになった。花はほのかに開いて美しい紅を見せていた。音楽の遊びをされるのでもなく、常の新春に変わったことばかりであつた。

女房なども長く夫人に仕えた者はまだ喪服の濃い色を改めずにいて、なお醒さましがたい悲しみにおぼれていた。他の夫人たちの

所へお出かけになることがなくて、院が常にこちらでばかり暮らしておいでになることだけを皆慰めにしていた。これまで執心がおありになるのでもなく、時々情人らしくお扱いになった人たちに対しては独居をあそばすようになってからはかえって冷淡になりになって、他の人たちへのごとく主従としてお親しみになるだけで、夜もだれかれと幾人も寢室へ侍<sup>はべ</sup>らせて、御退屈さから夫人の在世中の話などをあそばしたりした。次第に恋愛から超越しておしまいになった院は、まだこうした純粋なお心になれなかった時代に、怨<sup>うら</sup>めしそうな様子がありおり夫人に見えたことなどもお思い出しになって、なぜ戯れ事にせよ、また運命がしからしめ

たにせよ、そうした誘惑に自分が打ち勝ちえないで、あの人を苦しめたのであろう、そうめい聡明な人であつたから、十分の理解は持つていながらも、あくまで怨みうらきるということはなくて、どの人と交渉の生じた場合にも一度ずつはどうかと不安におびえたふうが見えた。と院は回顧あそばされて、そうした煩悶はんもんを女王によおうにさせたことを後悔される思いが胸からあふれ出るようにお感じになるのであつた。

そのころのことを見ていた人で、今も残っている女房は少しづつ当時の夫人の様子を話し出しもした。入道の宮が六条院へ入嫁になつた時には、なんら色に出すことをしなかつた夫人であつた

が、事に触れて見えた味気ないという気持ちの哀れであつた中にも、雪の降つた夜明けに、戸のあけられるまでを待つ間、身内も冷え切るように思われ、はげしい荒れ模様の空も自分を悲しくしたのであつたが、はいつて行くと、なごやかな気分を見せて迎へながらも、袖がひどく涙でぬれていたのを、隠そうと努めた夫人の美質などを、院は夜通し思い続けておいでになつて、夢にでも十分にその姿を見ることができるとあらうか、どんな世にまためぐり合うことができるのであらうかとばかりあこがれておいでになつた。夜明けに部屋へさがつて行く女房なのであらうが、

「まあずいぶん降つた雪」



と縁側で言うのが聞こえた。その昔の時のままなようなお気持ち  
ちがされるのであったが、夫人は御横にいなかった。なんという  
寂しいことであろうと院は思召おぼしめした。

うき世にはゆき消えなんと思ひつつ思ひのほかになほぞ程経ほどふ  
る

こうした時を何かによって紛らわしておいでになる院は、すぐ  
に召し寄せて手水ちよつずをお使いになった。女房たちは埋うづんでおいた火  
を起こし出して火鉢ひばちをおそばへおあげするのであった。中納言の

君や中将の君はお居間に来てお話し相手を勤めた。

「独<sup>ひと</sup>り寝<sup>ね</sup>がなんともいえないほど寂しく思われる夜だった。これでも安んじていられる自分なのに、つまらぬ関係をたくさんに作ってきたものだ」

とめいったふうに院は言っておいになった。自分までもここを捨てて行つたなら、この人たちはどんなに憂鬱<sup>ゆううつ</sup>になるだろうなどとお思ひになつて、居間の中がお見渡されになるのであつた。目だたぬように仏勤めをあそばして、経をお読みになる声を聞いていては、ただの場合でも涙の流れるものであるのに、まして院のお悲しみに深い同情を寄せている女房たちであつたから、痛切

においたましく思われた。

「この世のことではあまり不足を感じなくともよいはずの身分に生まれていながら、だれよりも不幸であると思わなければならぬことが絶えず周囲に起こってくる。これは自分に人生のはかなさを体験すべく仏がお計らいになるのだと思われる。それをしいて知らぬ顔にしてきたものだから、こうして命の終わりの近い時になつて、最も悲しい経験をすることになったのだ。これで負つて来た業も果たせた気がして、安らかな境地が自分の心にできて、執着の残るものもない私だが、あなたたちと以前よりも、より親密にして数か月を暮らしてきたことで、あなたたちとの別れにも

う一度心が乱れないかという不安が自分にできてきた。弱い私の心じゃないか」

とお言いになって、目をおおさえになるふうをしてお紛らしになろうとするにもかかわらず、院のお涙のこぼれるのを見る女房たちは、ましてとめどもなく泣かれるのであった。そうしていよいよ院が見捨てておしまいになることの歎なげかわしさをだれも訴えないのであるが、言い出しうる者もなかった。皆むせ返っていたからである。こんなふうに歎きに明かしておしまいになる朝、物思いに一日をお暮らしになった夕方などのしんみりとした時間には、愛人関係が以前あった人たちを居間に集めて語り合っのを慰

めにあそばす院でおありになった。

中將の君というのはまだ小さい時から夫人に仕えてきた人であつたが、院はいつとなく無関心でありえなくおなりになったか情人にしておしまいになったのを、彼女は夫人に対して自責の念に堪えないで、院の愛の手を避けるようにばかりしていたが、夫人の歿後<sup>ぼつご</sup>は愛欲を離れて、だれよりもすぐれて故人の愛していた女房であつたと思われになることによつて、形見と見てこの人に院は愛を持つておいでになった。性質も容貌<sup>ようぼう</sup>も皆よくて、喪服姿がうない松に似た可憐<sup>かれん</sup>な女である。親しくない女房には顔もありお見せにならないこのごろの院でおありになった。お近しく

した高官たちとか、御兄弟の宮がたとかは始終お訪ねたずされるのであるがあまり御面会になることもない。人と逢あっている時だけはよく自制して醜態を見せまいとしても、長く悲しみに浸っていてぼけた自分がどんなあやまちを客の前でしてしまいかもしれぬ、そうしたことがのちに語り伝えられることはいやである、歎き疲れて人に逢うこともできないと言われるのも、恥ずかしいことは同じであるが、話だけで想像されることよりも實際人の目で見られたことの噂うわさになるほうが迷惑になるとお思いになって、大將などもにも御簾越みすしでしかお逢いにならなかった。こんなふうに悲歎に心が顛倒てんとうしたように人が言うであろう間を静かに過ごしてか

ら、と出家の日をお思いになって、まだ人間の中をお去りになることをされないのであった。

他の夫人たちの所へ稀まれにおいでになることがあっても、そこでその人々が紫の女王でないことから新しいお悲しみが心に湧わいて涙ばかりが流れるのをみずからお恥ちじになってどちらへももう出かけられることがなくなっていた。中宮ちゅうぐうは御所へお入れになったのであるが、三の宮だけは寂しさのお慰めにここへとどめてお置きになった。

「お祖母ばあ様がおっしゃったから」

とお言いになって、宮は対の前の紅梅と桜を責任があるように

見まわっておいでになるのを、院は哀れに思召した。おほしめ

二月になると、花の木が盛りなものも、まだ早いのも、梢が皆霞こずえんで見える中に、女王の形見の紅梅に鶯うぐいすが来てはなやかに啼くのを、院は縁へ出てながめておいでになった。

植ゑて見し花の主人あるじもなき宿に知らず顔にて来居る鶯

春の空を仰いで吐息といきをおつかれになった。

春が深くなっていくにしたがって庭の木立ちが昔の色を皆備えてお胸を痛くするばかりであつたから、この世でもないほどに遠



くて、鳥の声もせぬ山奥へはいりたくばかり院はお思いになるの  
であつた。山吹の咲き誇つた盛りの花も涙のような露にぬれてい  
るところばかりがお目についた。よそでは一重桜が散り、八重の  
盛りが過ぎて樺桜かはぎくろうが咲き、藤ふじはそのあとで紫を伸べるのが春の順  
序であるが、この庭は花の遅速を巧みに利用して、散り過ぎた梢  
はあとの花が隠してしまうように女王がしてあつたために、いつ  
までも光る春がとどまっているようなのである。若宮が、

「私の桜がとうとう咲いた。いつまでも散らしたくないな。木の  
まわりに几帳きちようを立てて、切れを垂たれておいたら風も寄つて来ない  
だろうと思う」

たいした発明をされたようにこう言っておいでになる顔のお美しさに院も微笑をあそばした。

「覆<sup>おお</sup>うばかりの袖<sup>そで</sup>がほしいと歌った人よりも宮の考えのほうが合理的だね」

などとお言いになって、この宮だけを相手にして院は暮らしておいでになるのであった。

「あなたと仲よくしていることも、もう長くはないのですよ。私の命はまだあっても、絶対にお逢いすることができなくなるのです」

とまた院は涙ぐんでお言いになるのを、宮は悲しく思いに

なつて、

「お祖母<sup>ばあ</sup>様のおっしやったことと同じことをなぜおっしやるの、不吉ですよ、お祖父<sup>じい</sup>様」

と言つて、顔を下に伏せて御自身の袖などを手で引き出したりして涙を宮はお隠しになつていた。欄干<sup>すみ</sup>の隅の所へ院はおよりかかりになつて、庭をも御簾<sup>みす</sup>の中をもながめておいでになつた。女房の中にはまだ喪服を着ているのがあつた。普通の服を着ているのも、皆派手<sup>はで</sup>な色彩を避けていた。院御自身の直衣<sup>のうし</sup>も色は普通のものであるが、わざとじみな無地なのを着けておいでになるのであつた。座敷の中の装飾なども簡素になつていて目に寂しい。

今はとて荒<sup>あら</sup>しやはてん亡<sup>な</sup>き人の心とどめし春の垣<sup>かき</sup>根<sup>ね</sup>を

とお歌いになる院は真心からお悲しそうであつた。

徒<sup>と</sup>然<sup>ぜん</sup>さに院は入道の宮の御殿へおいでになつた。若宮も人に抱かれて従つておいでになつて、こちらの若宮といつしよに走りまわつてお遊びになるのであつた。花の木をおいたわりになる責任もお忘れになるくらいにおふざけになつた。

尼宮は仏前で経を読んでおいでになつた。たいした信仰によつておはいりになつた道でもなかったが、人生になんらの不安もお感じになるものもなくて、余裕のある御身分であるために、専心

に仏勤めがおできになり、その他のことにいっさい無関心でおいでになる御様子に見えるのを院はうらやましく思召した。こうした浅い動機で仏の御弟子でしになられた方にも劣る自分であると残念に思いになるのである。閼伽棚あかだなに置かれた花に夕日が照って美しいのを御覧になって、

「春の好きだった人の亡くなってからは、庭の花も情けなくばかり見えるのですが、こうした仏にお供えしてある花には好意が持たれますよ」

とお言いになった院は、また、

「対の前の山吹やまぶきはほかでは見られない山吹ですよ、花の房ふさなどが

ずいぶん大きいのですよ。品よく咲こうなどとは思っていない花と見えますが、にぎやかな派手なほうではすぐれたものですね。植えた人がいない春だとも知らずに例年よりもまたきれいに咲いているのが哀れに思われます」

と仰せられた。宮はお返辞に、

「谷には春も」（光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散るもの思ひもなし）

とお言いになるのであった。言うこともほかにありそうなものを自分の悲しみを嘲笑するにあたるようなことをお言いになるとはと院は心に思召しながらも、紫の女王はこうした思いやりのな

いことを言い出すことも最後まで絶対にならない女性であつたと、少女時代からの故夫人のことを追想してごらんになると、その時はこう、あの時はこうと、才氣と貴女らしい匂いにおの多かった性格、容姿、言った言葉などばかりが思われになつて、涙のこぼれてきたのを院はお恥じになつた。

夕方の霞かすみが物をおぼろに見せる美しい時間であつたから、院はそこからすぐ明石夫人あかしの住居すまいをお訪ねたずになつた。久しくおいでがなかつたのであるから突然なことに夫人は驚いたのであつたが、すぐに感じよく席を設けてお迎えするようなところに、この人のだれよりも伶俐れいりな性質は見えるものの、また故人はこうでもない

高雅な上品さがあつたと思ひ比べられては、その幻ばかりが追われるようにおなりになつて、悲しみがさらにまさつてくるのを、院は御自身ながらどうすれば慰む心であらうと苦しく思召した。こちらでは落ち着いて昔の話などを院はしておいでになつた。

「人をあまりに愛することは結果のよくないものだ」と、私は昔から知っていたし、またそのほかのことにも執着心がこの世に残らぬようにと心がけていて、一時逆境に置かれたころなどは、いろいろな理想もこの世に持つたと言つても、それは実現性のないことにきめて、どんな野山の果てで自分の命を果たしてしまつても惜しいものもないとだけは思えたものだが、年がいつて死期が近



づくころになって、いろいろな係累をふやすことになったために、今まで出家も遂げることができないでいるのが自分で齒がゆくてならない」

などと院はお言いになって、夫人と死別したばかりの悲しみでないように言っておいでになるが、明石の心には院の御内心は何によって苦しんでおいでになるかはよくわかっていて、道理なことであるとおいたわしく思った。

「他人から見まして、この世に未練の残るわけもないような人も、その人自身には捨てられない絆ほだしが幾つもあるものなのでございますから、ましてあなた様などがどうしてそう楽々と遁世とんせいの道

をおとりになることがおできになれましょう。深い考えもなく出家をいたす者はあとで見苦しいことも起こして、かえってそうならねばよかったように世間から申されることもあるものでございますから、道におはいりますことをお急ぎにならずにいいでになりますのが、あとでごりっぱな悟りをお得<sup>え</sup>になる過程になるかと存ぜられます。昔の例を承りましても、突然心の傷つけられますような悲しみにあいますとか、大きな失望をいたしましたとか申すような時に厭<sup>えん</sup>世的<sup>せい</sup>になつて出家をいたすと申すことはあまりほめられないことになっているではございませんか。もうしばらく御<sup>ご</sup>発<sup>はつ</sup>心<sup>しん</sup>をお延ばしになりました、宮様がたも大人におなり

になり御不安なことなどはいつさいないころまで、このままで御家族に動揺をお与えあそばさないようにしていただけましたらうれしかろうと存じます」

などとまじめに言っている明石に院は好感をお持ちになることができた。

「そんなになるまで待っていることが思慮深いのだったら、それよりもあさはかなほうがましなようだね」

などとお言いになって、昔から悲しいことに多くあっておいでになった話もあそばされた。

「昔、中宮がお崩れかくになった春には、桜が咲いたのを見ても、

『野べの桜し心あらば』（深草の野べの桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け）と思われたものですよ。それはごりっぱな方であることが小さいころから心にしみ込んでいたために、お崩れになった時にも私がだれよりもすぐれて悲しかったのです。恋愛の深さ浅さと故人を惜しむ情とは別なものだと思う。長く同棲どうせいした妻に別れて、病的にまで悲しんで、その人が忘れられないのも恋愛の点ばかりでそうなのではありませんよ。少女時代から自分が育て上げてきた人といっしょに年をとってしまった今になって、一人だけが残されて一方が亡なくなってしまったということが、みずから憐あわれまれもし、故人を悲しまれもして、その時あの時と、あ

の人の感情の美しさの現われた時とかあの人の芸術とか複雑にいろいろなことが思わせられるために、深い哀愁に落ちていくのです」

などと、夜がふけるまで、昔をも今をも話しておいでになつて、このまま明石夫人のところで泊まっていってもよい夜であるがとお思ひになりながら院のお歸りになるのを見て、明石夫人は一抹いちまつの物足りなさを感じたに違いない。院も御自身のことではあるが、怪しく変わってしまった心であるとお思ひになつた。

お歸りになるとまた仏勤めをあそばして夜中ごろに昼のお居間で仮臥かりぶしのようになしてお寝やすみになつた。

翌朝早く院は明石<sup>あかし</sup>夫人へ手紙をお書きになった。

泣く泣くも歸りにしかな仮の世はいづくもつひのとこよなら  
ぬに

という歌であつた。昨夜<sup>ゆうべ</sup>の院のお仕打ちは恨めしかったのであるが、こんなふうには別人であるように悲しみに疲れておいでになる御様子を思つては自身のこととはさしおいて明石は涙ぐまれるのであつた。

かりがゐし苗代水の絶えしよりうつりし花の影をだに見ず

いつも変わらぬ明石の返歌の美しい字を御覧になっても、この人を無礼なちんにゆうしや闖入者のように初めは思っていた女王が、近年になつて互いに友情を持ち合うようになり、自尊心を傷つけない程度の交わりをしていたのであるが、明石はそれとも気がつかなかったであろうなどとも院は来し方のことを思っておいでになった。お寂しくてならぬ時にだけは明石夫人のそのような簡単な訪問を夫人たちの所へあそばされる院でおありになった。むすめ妻妾と夜を共にあそばすようなことはどこでもないのである。

夏の更衣ころもがえに花散里夫人はなちるさとからお召し物が奉られた。

夏ごろもたちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはする

この歌が添えられてあつた。お返事、

羽衣のうすきにかはる今日よりは空蝉うつせみの世ぞいとど悲しき

賀茂かも祭りの日につれづれで、



「今日は祭りの行列を見に出ようと思って世間ではだれも興奮をしているだろう」

こんなことをお言いになって、賀茂の社前の光景を目に描いておいでになった。

「女房たちは皆寂しいだろう、実家のほうへ行つて、そこから見物に出ればいい」

などとも言つておいでになった。中將の君が東の座敷でうたた寝しているそばへ院が寄つてお行きになると、美しい小柄な中將の君は起き上がった。赤くなっている顔を恥じて隠しているが、少し癖づいてふくれた髪の毛の横に見えるのがはなやかに見えた。紅

の黄がちな色の袴はかまをはき、単衣ひとえも萱草色かんぞうを着て、濃い鈍色にびに黒を重ねた喪服に、裳もや唐衣からぎぬも脱いでいたのを、中将はにわかになんて引き掛けたりしていた。葵あおいの横に置かれてあったのを院は手にお取りになつて、

「何という草だったかね。名も忘れてしまったよ」  
とお言いになると、

さもこそは寄るべの水に水草みぐさおめ今日のかざしよ名さへ忘るる

と恥じらいながら中將は言った。そうであつたと哀れに思ひ  
になつて、

おほかたは思ひ捨ててし世なれどもあふひはなほやつみおか  
すべき

こんなこともお言いになり、なおこの人にだけは聖ひじょうの心持ちに  
もなれず、行為もお見せになることはおできにならないのであつ  
た。

五月雨さみだれの薄暗い世界の中では物思ひを続けておいでになるばか

りの院は、寂しかったが十幾日かの月がふと雲間から現われた珍しい夜に大將が御前に来ていた。花橘たちばなの木が月の光のもとにあざやかに立って薰かおりも風に付いておりおりはいつてきた。「千世をならせる」というこれと深い関係の杜鵑ほととぎすが啼なけばよいと待っているうちに、にわかには雲が湧わき出してきて、はげしく雨の降るのに添そって吹き出した風のために、燈籠とうろうの灯ひも消えそうになって、空の暗さが深く思われる時に「蕭蕭せうせう暗雨あんう打窓まど声をうつつこゑ」などと、珍しい詩ではないが院のお歌いになる美声をお聞きすると、恋を解する女に聞かしむべきものであると惜しまれた。

「独身生活というものは、私一人が経験しているものでもない

が、怪しいほど寂しいものだ。山へはいつてしまおう前にこうして習慣をつけておくことは非常によいことだと思つ」

などと院はお言いになつて、

「女房たち、ここへ菓子でも出すがよい。男たちに命じるほどのことでもないから」

などとも氣をつけておいでになつた。夕霧は空をおながめになる院の寂しい御表情を見ていて、こんなふうにいづまでもいつまでも故人を悲しんでおいでになつては、出家をされても透徹した信仰におはいりになることはむずかしくはないかと思つていた。

ほのかな隙見<sup>すきみ</sup>をしただけの面影すら忘れないのであるからまし

て院が女王のためのお悲しみの深さは道理至極であると言わねばならぬと同情も申していた。

「昨日か今日のここのように思っておりますうちに御一周忌にももう近づいてまいります。御法事はどんなふうにあそばすおつもりでございますか」

と大将が言うのと、

「何も普通と違ったことをしようと思っていない。女王が作らせたままになっている極樂の曼陀羅まんだらをその節に供養すればいいことと思う。書いておいた経もたくさんあるはずなのだが、某僧都是故人からどうするかをよく聞いてあるようだから、それに加えて

することも皆僧都の意見によることにしようと思う」

と院は仰せられた。

「御自身の御法要についてのこともお仕度したくをあそばしておかれましては、お考え深いことでしたが、お二方の上で申しますと、この世での御縁は短かったですから、せめて形見になる人をお残しくださいと存じますと残念でございます」

「しかし子は早く死なずに現存している妻のほうにも少なかったのだからね。私自身が子は少なくしか持てない宿命だったのだから。あなたによって子孫を広げてもらえばいい」

などと院はお言いになるのであって、何につけても忍びがたい

悲しみの外へ誘い出されることをお恐れになり、故人のこともありお話しにならぬうちに、「いにしへのこと語らへば時鳥ほととぎすいか知りてか古声ふるこゑに啼なく」と言いたいような杜鵑ほととぎすが啼いた。待たれていた声なのであるが、

亡なき人を忍しのぶる宵よひの村雨むらさめに濡ぬれてや来つる山ほととぎす

前よりもいっそう悲しいまなざしで空を院はおながめになった。夕霧は、



郭公君ほととぎすにつてなん古さとの花橘たちばなは今盛りぞと

と歌った。この時に女房たちもそれぞれ歌を詠よんだのであるがここには省はいておく。

大將はそのまま宿直とのいすることにした。御独居生活の心苦しさに時々霧はこうしておそばで泊とまってゆくのであるが、紫の女王のいたころにはたやすく近い所へも寄よることを院はお許しにならなかった帳台のかたわらに寝ることによつても、大將は昔が今にならぬことを悲しんだ。

暑いころに涼しい水亭すいていに出て院がながめておいでになる池に

は、蓮はすの花が盛りに咲いていた。恋しい人への追懐のためにこの花の前にもうつろな気持ちを覚えておいでになるうちに、日も暮れに近くなった。はなやかに蝸ひぐらしの鳴く声を聞きながら、撫子なでしこが夕ゆう映ばえの空の美しい光を受けている庭もただ一人見ておいでになることは味気ないことでおありになった。

つれづれとわが泣き暮らす夏の日をかごとがましき虫の声かな

蛍ほたるが多く飛びかうのにも、「夕殿せきでんに蛍飛んで思ひ悄然せうぜん」など

と、お口に上る詩も楊妃ようひに別れた玄宗の悲しみをいうものであつた。

夜を知る蛩を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

七月七日も例年に変わった七夕たなばたで、音楽の遊びも行なわれずに、寂しい退屈さをただお感じになる日になった。星合いの空をながめに出る女房もなかった。

未明に一人臥ふしの床をお離れになって妻戸をお押しあけになると、前庭の草木の露の一面に光っているのが、渡殿わたどののほうの入り

口越しに見えた。縁の外へお出になって、

七夕の逢<sup>あ</sup>ふ瀬は雲のよそに見て別れの庭の露ぞ置き添ふ

こう口ずさんでおいでになった。

秋風らしい風の吹き始めるころからは法事の仕度<sup>したく</sup>のために、院のお悲しみも少し紛<sup>ほ</sup>れ<sup>う</sup>れていた。あれから一年たったかとお思<sup>おも</sup>いになると呆然<sup>ぼうぜん</sup>ともおなりになるのである。命日である十四日には上から下まで六条院の中の人々は精進潔斎して、曼陀羅<sup>まんだら</sup>の供養に列するのであった。例の宵<sup>よい</sup>の仏前<sup>ぶつぜん</sup>のお勤めのために手水<sup>ちやうず</sup>を差し上げ

る役にあたった中將の君の扇に、

君恋ふる涙ははてもなきものを今日をば何のはてといふらん

と書かれてあつたのを、手に取ってお読みになつてから、院が  
またその横へ、

人恋ふるわが身も末になりゆけど残り多かる涙なりけり

とお書き添えになつた。

九月になり被<sup>き</sup>綿<sup>せわた</sup>をした菊を御覧になつて、

もろともにおきぬし菊の朝露もひとり袂<sup>たもと</sup>にかかる秋かな

と院はお歌いになつた。

十月は時<sup>しぐれ</sup>雨がちな季節であつたからいつそう院のお心はお寂し  
そうで、夕方の空の色など言いようもなく心細く御覧になるの  
であつて、「いつも時雨は降りしかど」（かく袖<sup>そで</sup>ひづるをりはな  
かりき）などと口ずさんでおいでになつた。空を渡る雁<sup>かり</sup>が翼を並  
べて行くのもうらやましくお見守られになるのである。

大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂たまの行く方へ尋ねよ

何によつても慰められぬ月日がたつていくにしたがい、院のお  
悲しみは深くばかりになった。

五節ごせちなどといって、世の中がはなやかに明るくなるころ、大将  
の子息たちが殿上勤めにはじめて出たといつて、六条院へ来た。

二人とも非常に美しい。母方の叔父おじである頭中將とちゅうのや蔵人少將くらうとなど  
が青摺あおずりの小忌衣おみごろものきれいな姿で少年たちに付き添つて来たので  
ある。朗らかなふうのこうした若い人たちを御覧になる院は、御  
自身の青春の日もお振り返らなくなって昔のこの日の舞い姫に心

をお惹<sup>ひ</sup>かれになったことなどもさすがになつかしいこととお思い出しになった。

宮人は豊<sup>とよ</sup>の明りにいそぐ今日<sup>けふ</sup>日かげも知らで暮らしつるかな

今年をこんなふう<sup>に</sup>に隠忍してお通しになった院は、もう次の春になれば出家を実現させてよいわけであるとその用意を少しずつ始めようとされるのであったが、物哀れなお気持ちばかりがされた。院内の人々にもそれぞれ等差をつけて物を与えておいでになるのであった。目だつほどに今日までの御生活に区切りをつける



ようなことにはしてお見せにならないのであるが、近くお仕えする人たちには、院が出家の実行を期しておいでになることがうかがえて、今年の終わってしまうことを非常に心細くだれも思った。人の目については不都合であるとお思になった古い恋愛関係の手紙類をなお破るのは惜しい気があそばされたのか、だれのも少しずつ残してお置きになったのを、何かの時にお見つけになり破らせなどして、また改めて始末をしにおかかりになったのであるが、須磨<sup>すま</sup>の幽居時代に方々から送られた手紙などもあるうちに、紫の女王<sup>によおう</sup>のだけは別に一束になっていた。御自身がしてお置きになったのであるが、古い昔のことであつたと前の世のことの

ようにお思われになりながらも、中をあけてお読みになると、今書かれたもののように、夫人の墨の跡が生き生きと<sup>おぼしめ</sup>していた。これは永久に形見として見るによいものであると思召されたが、こんなものも見てならぬ身の上になろうとするのではないかと、気がおつきになって、親しい女房二、三人をお招きになって、居間の中でお破らせになった。こんな場合でなくても、亡<sup>な</sup>くなった人の手紙を目に見ることは悲しいものであるのに、いっさいの感情を滅却させねばならぬ世界へ踏み入ろうとあそばす前の院のお心に女王の文字がどれほどはげしい悲しみをもたらしたかは御想像申し上げられることである。御気分はくらくくなって涙は昔の墨の跡

に添って流れるのが、女房たちの手前もきまり悪く恥ずかしくお  
なりになって、古手紙を少し前方へ押しやって、

死出の山越えにし人を慕ふとて跡を見つつもなほまどふかな

と仰せられた。女房たちも御遠慮がされてくわしく読むことは  
できないのであったが、端々の文字の少しずつわかっていくだけ  
さえも非常に悲しかった。同じ世にいて、近い所に別れ別れに  
なっている悲しみを、実感のままに書かれてある故人の文章が、  
その当時以上に今のお心を打つのは道理なことである。こんなに

めめしく悲しんで自分は見苦しいとお思いになって、よくもお読みにならないで長く書かれた女王の手紙の横に、

かきつめて見るもかひなし藻塩草もしほぐさ同じ雲井の煙とをなれ

とお書きになって、それも皆焼かせておしまいになった。

仏名の僧を迎える行事も今年きりのことであるとお思いになると、僧の錫杖しゃくじょうの音も身に沁しんでお聞かれになった。院のために行く末長く寿命の保たれることを僧たちの祈り唱えるのも、院のお心には仏へ恥ずかしくお思われになった。雪が大降りになって厚

く積もった。帰ろうとする導師を院は御前へお呼びになつて、杯を賜わったりすることなども普通の仏名式の日以上の手厚いおねぎらいであつた。纏頭<sup>てんとう</sup>なども賜わつた。長くこの院へお出入りし、御所の御用も勤めているお馴染<sup>なじ</sup>み深い僧が、頭の色もようやく変わつて老法師になつた姿も院には哀れにお思われになるのであつた。この日も例の宮がた、高官たちが多数に参入した。梅の花の少し花らしく顔を上げ出したのが、雪の中にきわだつて美しく見える日であつたから、音楽の遊びもあつてしかるべきなのであるが、本年中はなお管絃<sup>かんげん</sup>もむせび泣きの声をたてるもののように思召されるお心から、そのことはなくて、詩歌を歌わせてお聞

きになるくらいのこととどめられた。導師へ院が杯をおさしになつた時のお歌は、

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん

というのであつて、お返し、

千代の春見るべきものと祈りおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる

参会者の作も多かったが省いておく。院の御美貌びぼうは昔の光源氏  
でおりになった時よりもさらに光彩が添ってお見えになるのを  
仰いで、この老いた僧はとめどなく涙を流した。

今年が終わることを心細く思召す院であつたから、若宮が、  
「儼なや追らいをするのに、何を投げさせたらいちばん高い音がするだ  
ろう」

などと言つて、お走り歩きになるのを御覧になつても、このか  
わいい人も見られぬ生活にはいるのであるとお思ひになるのがお  
寂しかった。

物思<sup>も</sup>ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬ  
る

元日の参賀の客のためにことにはなやかな仕度<sup>したく</sup>を院はさせてお  
いでになった。親王がた、大臣たちへのお贈り物、それ以下の人  
たちへの纏頭<sup>てんとう</sup>の品などもきわめてりっぱなものを用意させておい  
でになった。



## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---